

1930年代のエンパイア・ゲームズ開催地をめぐる言説

—オーストラリアの新聞にみる報道、論説、見解を中心に—

川本真浩

(高知大学教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門)

"In the Balance! British Empire Games" : News, Opinions and Discourse
about the Venue of the Games in Australian Newspapers in the 1930s

Masahiro Kawamoto

Humanities and Social Sciences Unit, Humanities and Social Sciences Cluster, Kochi University

Abstract: This paper traces news and opinions appearing in Australian newspapers about the venues of the British Empire Games (BEG) held in the 1930s, and provides suggestions for analysing this newspaper discourse from the perspective of historical studies on the British Empire and the Commonwealth of Nations. In the first section, I reconstruct a story of the alteration of the venue of the second BEG in 1934. The proposal to hold the Games in South Africa was declined by that country, which led to further discussion and increasing sentiment that the future of the BEG might be unstable. BEG advocates and most of those who were concerned with the Games, however, seemed not to have lost hope, and the BEG were duly held in London in 1934. The second part shows that the Australian sporting persons who took part in the first Games in Hamilton, Canada, in 1930 eagerly hoped to host the Games in their country but regrettably they knew they had geographical and financial drawbacks as well as insufficiencies in their sporting institutions. They finally got the unanimous decision in the BEG Federation meeting to host the third Games in Sydney in spite of many anxieties both from within and outside the country. Newspaper articles about this topic are helpful when we research into the early period of the history of BEG/Commonwealth Games and we can find meaningful discourse on the BEG in this crucial part of the British Empire/Commonwealth history.

Keywords: British Empire Games, British Empire, British Commonwealth of Nations, sports history, Australia

キーワード : エンパイア・ゲームズ、イギリス帝国、コモンウェルス、スポーツ史、オーストラリア

はじめに

オリンピック、ワールドカップ、世界選手権など、国際的なスポーツ大会の開催地の決定方法やその招致活動については、当該スポーツの人気やそれをとりまく利権が大きければ大きいほど、大きな関心呼び、またさまざまな問題を惹起する。思い起こせば最近も話題には事欠かない。たとえば、サッカーでは、**2022**年ワールドカップ開催地の招致活動や国際サッカー連盟(FIFA)首脳部が絡んだとされる疑惑が報じられている。また、オリンピックについても、開催地としていったん立候補を表明した複数の都市が住民による反対や巨額の財政負担などを理由に撤退するなど、オリンピックの開催に対するスタンスも都市や国による相違があらわになりつつある。

コモンウェルス・ゲームズはオリンピックの間に入る4年ごとに開催されている国際的な総合スポーツ大会である。エンパイア・ゲームズの名で開催が始まった1930年代以来、オリンピックをライバル視する意識が大会関係者の間にしばしばみだせるが、開催規模や注目度に関してオリンピックに及ばない状況は当時も今も変わりはない。それゆえ、開催地を決める問題にしても、オリンピックあるいはサッカーのワールドカップほどの社会的インパクトはない。ただ、文化的局面からとらえた帝国＝コモンウェルスの歴史の変容を明らかにするという視点でもってエンパイア・ゲームズ/コモンウェルス・ゲームズの歴史にアプローチしてみると、政治史や経済史からはみえてこない帝国＝コモンウェルスの姿ひいては「もうひとつのコモンウェルス」を捉えることができる⁽¹⁾。

初期のエンパイア・ゲームズのなかでもハミルトン(カナダ)で開催された第1回大会については、先行研究ですでに多くのことが論じられてきた⁽²⁾。また、同じカナダのヴァンクーヴァーで1954年に開催された第5回大会は、一般的な関心—いわゆる「ミラクル・マイル」やマラソン選手J・ピーターズの「アクシデント」など—to留まらず学術的にもしばしば注目される大会である⁽³⁾。しかしながら、両大会の間に開催された大会は—第4回大会について論じたG・ライアンによる論稿を除いて—ほとんど関心を集めるに至っていない⁽⁴⁾。じつのところ、エンパイア・ゲームズ連盟 British Empire Games Federation (現在の Commonwealth Games Federation ; 以下「BEG連盟」と記す。)の文書が保管場所の洪水被害によって事実上失われたために、同時期の大会に関する研究を進めづらいという事情もある。それでも、オリンピックと同じく4年に1度のサイクルで大会が開催されることにより、「もうひとつのコモンウェルス」を形づくってきた歴史的意義を考えるうえで、第1回大会だけでなく初期の大会のありようを明らかにすることは重要である。本稿では、第二次世界大戦が始まるまでの2つのエンパイア・ゲームズ(第2回及び第3回)の開催地決定をめぐる新聞報道に焦点をあわせて、そこにみられる大会招致をめぐる言説のなかから、当時の本国とドミニオンの関係、ネイション、帝国主義、ナショナリズム、人種主義、スポーツと政治ないし経済との関係、開催(候補)都市の思惑と現実などを考える手がかりをみいだす。本稿で用いる主な史料は、オーストラリア国立図書館の新聞記事検索システム Trove を活用して得られたオーストラリア各地の新聞記事である。そのほか、本国イギリスの新聞記事、スコットランド全国スポーツ連盟 Scottish National Sports Federation (以下「SNSF」と記す。)文書、カナダ・アマチュア競技連合 Amateur Athletics Union of Canada (以下「カナダAAU」と記す。)文書などによってBEG連盟文書の欠落部分を可能なかぎり埋め合わせる。とくに、第2回大会(ロンドン)に続く第3回大会のシドニー招致にいたる関係者の動向をオーストラリアの新聞記事でたどり、イングランドという「中心」に対する「周縁」オーストラリアの新聞報道にみられる言説の特性を意識しつつ考察することによって、「もうひとつのコモンウェルス」形成期におけるエンパイア・ゲームズの社会的位置づけないし意味づけに迫ることができるだろう。

第2回大会(1934年)について

1930年8月にハミルトンでエンパイア・ゲームズが開催されたとき、大会参加国の役員が集まって今後の大会のありかたについて話し合った⁽⁵⁾。このときの協議について、ロンドン（イギリス）で発行されていた『タイムズ』には次のような2つの記事がみられる。

（ハミルトン，8月20日）当地で今朝ひらかれたさまざまな参加国の代表による会合においてエンパイア・ゲームズを定期的に開催していくことが全員一致で合意された。ニュージーランドと南アフリカがそれぞれ次回大会を自国で開催させてほしいと申し出た。開催地問題を扱い、帝国スポーツ連盟の規約について調査・作成すること、ひいては将来開催される大会を統括し、さまざまなスポーツにかかる全ての問題に帝国として対応できる統一体制をつくるべく、委員会が設置された。この件は、金曜（22日＝訳注）の全体会で報告され、そこで決定される見通しである⁽⁶⁾。

（ハミルトン，8月22日）当地で今朝ひらかれた全参加国の代表による会合において、エンパイア・ゲームズを今後も続けて開催していくこと、そして次回大会を1934年に南アフリカで開催することが決まった。ニュージーランドは1938年に大会を開催したいと申し出たが、その件に関する決定は先送りとなった。また、帝国スポーツ連盟の設立も決まった。同組織には評議会を置いて、帝国内各国から3名ずつ代表を出すことになった。ロンドン在住のJ・F・ワドモア J.F.Wadmore が事務長に任じられ、本部はロンドンにおいて、まずは規約を作成し、決定前に入念に調査することになった。会議に出席したすべての代表が、それぞれ自国政府にアプローチして、エンパイア・ゲームズのための補助金を求めることで一致した。

さらにこの件は今年9月にロンドンで開催される予定の帝国会議で取り上げられることが期待される。・・・⁽⁷⁾

これら2つの記事から、このときに初めて「4年に1度のサイクル」という開催形態が合意された—すなわちハミルトンでエンパイア・ゲームズが開幕する前には必ずしも「4年に1度のサイクル」は確定していなかった—ことがわかる。いっぽう、メルボルン（オーストラリア）で発行されていたスポーツ専門紙『スポーティング・グローブ』も、この会合についてほぼ同様に報じた⁽⁸⁾。

（ハミルトン，8月22日）当地で現在開催中の大会役員たちが集まった会合において、英帝国スポーツ連盟を設立する方針が決められた。各国代表3名ずつで構成すること、イングランドチームの監督であるJ・F・ワドモア氏が事務長兼会計担当とすること、本部はロンドンに置くことも決まった。他の役職は委員会が設置されるときに決める。この新組織は、4年ごとに開催され、出場者を帝国内に限定する「小オリンピック」を育てることになる。・・・会合ではすべての発言者が大会を継続して開催すべきだとの意見を述べた。・・・次回の大会は南アフリカで開催される。また、ニュージーランドが1938年大会の開催を申し出たが、決定には至らなかった⁽⁹⁾。

シドニーで発行されていたスポーツ専門紙『レフェリー』も「オーストラリア開催は？」という見出しをつけて、「次回のエンパイア・ゲームズは1934年に南アフリカで開催されるという。1911年の最初のエンパイア・ゲームズ[ママ]では、カナダ（1位）、イギリス（2位）、オーストラレイジア（3位）だけが参加した。イギリスとカナダが大会を開催したのだから、心情的には次の開催地はオーストラリアかニュージーランドとなるかもしれない」と主張する小さな記事を掲載した⁽¹⁰⁾。

第1回大会のあと、『タイムズ』（ロンドン）は大会の「成功」を報じる記事や社説を掲載している⁽¹¹⁾。オーストラリアのスポーツ・メディアと『タイムズ』のような本国エリート層に影響力をもつ新聞という一見すると共通項のあまりなさそうなメディアが、ともにエンパイア・ゲームズが継続して開催するに値するイベントであると喧伝していたことがわかる。研究者D・ゴーマンが指摘するように、第1回大会は開催地ハミルトンの地元メディアでは大きくとりあげられ、競技会場に多くの人びとが訪れたものの、ほど近いカナダ随一の大都市トロントの新聞は

エンパイア・ゲームズをわずかにしか報じなかった⁽¹²⁾。帝国イベントとして—またスポーツイベントとしてでさえ—第1回大会に対する注目度を過大評価することができないとすれば、本稿で引用した新聞記事の内容をエンパイア・ゲームズに対する一般的な評価としてそのまま受け取るわけにはいくまい。

しかも、そうした不確実な大会の命運をさらに危うくする要素をはらんでいたのが次回開催地として予定されていた南アフリカであった。当時の南アフリカでは、いわゆるアパルトヘイト政策が本格的に実施される前とはいえ、すでに人種隔離システムが社会のさまざまな局面に構築されつつあり、スポーツもその例外ではなかった。カナダ選手団の一員としてオリンピックに出場しメダルを獲得していた中距離走者P・エドワーズがエンパイア・ゲームズでは英領ギアナ代表選手として出場しており、非白人選手が白人選手と同じレースで競い合うことを認めない南アフリカの「システム」が第2回大会で適用される恐れがあることは、カナダなど他のドミニオンが憂慮するところであった。とくに1931年、USAの陸上競技選手団が南アフリカに遠征した際にE・トーラン—翌32年のロサンゼルス・オリンピックにおいて100m走と200m走で優勝することになる黒人短距離走者—が南アフリカ側の要請で白人選手と競走できなかつたことは、そうした懸念が現実になりうると思わせるに十分であった。研究者B・キッドは、カナダ及び他の数カ国が南アフリカのそうした措置は受け入れがたいとしたことを指摘している⁽¹³⁾。

ただし当時の新聞に現れる言説はいささか曖昧である。1932年4月には、南アフリカの競技関係者が第2回大会の開催を返上する意向を示したことが、エディンバラ（スコットランド）で発行されていた『スコツマン』で伝えられた。

（ヨハネスブルク、3月31日）今日、当地で開かれた南アフリカのオリンピック・エンパイア・ゲームズ協会の会議で、委員長リンドバーク氏が示唆したところによると、南アフリカは次のエンパイア・ゲームズを開催するよう勧められていたが、現下の経済情勢に鑑みて、その開催は不可能であろう、とのことである⁽¹⁴⁾。

少なくとも新聞報道に関するかぎり、1932年半ばの段階で、開催返上の真の理由がとくに大きく取りあげられることはなかった。南アフリカの開催辞退の背景に人種問題があることに言及した記事の例としては、1934年大会のロンドン開催が正式に決まったことを伝えた『レフェリー』（シドニー）の1933年3月22日付け記事がある。

・・・2年前に第2回大会は南アで開催すると提案されたが、南アフリカの陸上競技団体がカラーバー（人種による制限＝訳注）の堅持を決定し、たとえ無礼だと思われてもインドや西インド諸島などの選手参加を認めない、ということになったので、ロンドンでの代替開催が決まった。・・・（傍点筆者）⁽¹⁵⁾

辞退理由の如何はさておき、1932年5月以降、南アフリカにかわる開催地に関する記事が各地に現れるようになる。たとえば、オーストラリアでは、エンパイア・ゲームズに関わる競技団体の関係者が1934年大会をシドニーかメルボルンで開催する方向で各州の関係者と連絡をとりはじめたことが報じられた⁽¹⁶⁾。イギリスでは、アマチュア・アスレティック協会 Amateur Athletic Association の会議において、1934年大会はイングランドで開催される可能性があるとの話がでたことが報じられた⁽¹⁷⁾。

1932年の夏にロサンゼルス（USA）でオリンピックが開催されたとき、エンパイア・ゲームズ参加国の代表による協議がおこなわれた。そこでは、南アフリカの代表から辞退が正式に伝えられ、これに代わる開催地について意見が交わされた。カナダ、イングランド、オーストラリアが名乗りを上げたものの、このロサンゼルスでの会合では開催地の決定には至らず、開催を引き受ける国は開催都市や開催条件などにかかる保証を得たうえで1932年末までに申し出ること、その開催申請をふまえて翌33年1月末までに第2回大会の開催地を決めることが合意された⁽¹⁸⁾。あわせて、エンパイア・ゲームズの開催を統括する団体を設立し、その規約を定め、事務局をロンドンに置くことも合意された。1933年1月に開かれる会議は、統括団体の設立にかかる諸事項を確定し、次回大会の開

催地を決定することになった。ハミルトンで合意された統括団体設立の方針は2年も経ってようやく実を結び、大会を4年に1度のサイクルで開催するための組織的な体制が整備されることになったのである。

オーストラリアの新聞はいずれも次回大会の開催地としてオーストラリア（メルボルン）が候補になったことを伝えたが、その実現の見込みについては新聞ごとに微妙なニュアンスの違いがあった。クィーンズランド州の新聞は、オーストラリアは財政支援の面で他国よりも不利であることを指摘し、「カナダやイングランドには財政的な裏づけがあるので、オーストラリアで開催されることはなさそうだ」（ブリスベーンで発行されていた『テレグラフ』）、とした⁽¹⁹⁾。『シドニー・モーニング・ヘラルド』も「ロンドン開催が有力」と報じ、メルボルンで発行されていた『アーガス』は「ロンドンとトロントが有力だが・・・最終決定はまだである」と含みをもたせた一文を付した⁽²⁰⁾。その後、町の開基100周年記念行事のひとつとしてメルボルンにエンパイア・ゲームズを招致しようという話がいったん出たものの、とりたてて具体的な動きにつながることはなく、大会の実現可能性は低いとする記事が『スポーティング・グループ』（メルボルン）に掲載された⁽²¹⁾。さらに『レフェリー』（シドニー）は、同年12月22日にエンパイア・ゲームズに関わる国内競技団体の代表がシドニーに集まって開いた会議で、オーストラリア・エンパイア・ゲームズ協会 Australian British Empire Games Association（以下「豪BEG協会」と記す。）が正式に設立されると同時に、メルボルンで1934年大会を開催することはないということを確認した、と報じた⁽²²⁾。同記事に拠れば、メルボルンの当局関係者の一部に「開基100周年の祝賀行事はより広く国際的にアピールしたいので、帝国に限定される競技会を開くのは賢明ではない」（傍点筆者）との考えがあったという。

1933年1月30日にロンドンで開催されたエンパイア・ゲームズ参加国の代表による会議の内容は、3月初めに本国及びドミニオン各地の新聞で報じられた。もっとも詳しく報じた『タイムズ』（ロンドン）によると、南アフリカとオーストラリアが1934年大会の開催は引き受けられないこと、カナダが開催を引き受ける用意はあるもののイングランドの希望に従うことをそれぞれ表明したのち、イングランドが1934年に大会を開催する準備を進めていることが明らかにされて、同大会をイングランドで開催することが正式に合意された⁽²³⁾。

ここでカナダが含みを持たせたニュアンスで開催を辞退した経緯については、カナダAAUの議事録に興味深い記載がある⁽²⁴⁾。1932年12月におこなわれたカナダAAUの会議で、1934年大会の開催地としてカナダが正式に立候補するか否かについて議論が交わされた。その席上、第1回大会開催の立役者であるロビンソンは、ロサンゼルスでの会議に際して1934年大会のカナダ開催を提起したのは、カナダ内国博覧会（トロント）の主催者がエンパイア・ゲームズの開催に関心があるとロビンソンに伝えてきていたことが前提にあったと発言した。さらにロビンソンは、「ロンドンで開催するなら最大6万ドルの民間補助金が期待できる」とイングランドの代表がロサンゼルスでの会議で発言したことも披露した。しかし「その後、カナダ内国博覧会的主催者からは何の音沙汰もない」ため、カナダAAUとしては1934年大会をカナダで開催することは不可能であるとの結論に達したという⁽²⁵⁾。

1934年大会のロンドンへの開催地変更に関しては、本国でイングランドやウェールズに先んじて国内協会を設立するなどエンパイア・ゲームズに積極的に参画する姿勢を示していた一かつドミニオンとは異なった位置取りにある大会参加国としてのスコットランドの動向も興味深い⁽²⁶⁾。第1回大会の選手派遣費用の残額を引き継いで結成されたスコットランドのエンパイア・ゲームズ協会にあたるSNSFは、ロサンゼルスでの会議の前後をとおして、南アフリカの代替開催地としてロンドン（イングランド）を推す方針をとった。あわせてSNSFは「ロンドンで開催されることになった場合、本国からの参加国が等しく役員を出すような役員選出システムを確立させる」ことを新たに結成されるBEG連盟の会議で提起するよう、1932年10月に決議した。当時のスコットランドのスポーツ界は、単独で開催事業を引き受けることはできないにせよ、イングランドで大会が開催される場合は、その運営に直接に関与していこうとする明確な意思があったことがうかがえる。

遠方のドミニオンから派遣される選手団への旅費補助を中心とした財政支援が確実に得られる本国イングランドでの開催が決まったものの、第2回大会を開催する前のエンパイア・ゲームズについては未だ国際スポーツ大会としての安定したステータスが確立されていなかったとする言説もみいだせる。たとえば『テレグラフ』（ブリスベーン）は1933年5月12日付け記事で次のように論評している。

「エンパイア・ゲームズの将来は流動的」

先日のエンパイア・ゲームズ会議において、南アフリカ、オーストラリア、カナダは大会を開催できないとそれぞれ表明した・・・ので、次回大会はイングランドで開催されることが正式に決まった・・・過度に悲観になることはつつしむとしても、エンパイア・ゲームズの将来はたいへん流動的である。イギリスの協会（イングランドのエンパイア・ゲームズ国内協会を指す＝訳注）が開催計画を固める前に、そもそもどの国が参加するのか、そして各代表チームはどれくらいの規模かを確定せねばならないという実務的な手続きもある。現時点でも、いくつかの帝国構成単位は不参加か、またはごく小さな規模のチームしか派遣しないだろうことが見込まれている⁽²⁷⁾。

第2回大会は1934年8月4日から11日までロンドンで開催された。参加国数は第1回大会のそれと比べて1・5倍の16カ国だったが、選手数は約500名で前回大会と比べて2割強の増加にとどまった。選手宿舎としてハイドパークに近いホテルがあてがわれたのは、同公園を練習場所として使用することも想定したものとされたが、学校施設を転用したハミルトンでの前回大会と比べて好評を博するかと思いきや、同一チームの選手が分散して宿泊することになったためにかえって不評だったともいわれる。競技会場についても、自転車競技がロンドンから約三百キロ離れたマンチェスタでおこなわれたほか、他競技の会場もロンドン郊外に分散していた⁽²⁸⁾。カナダの小都市ハミルトンとはあらゆる点で対照的な帝国の首都ロンドンで開催されたエンパイア・ゲームズであったが、「帝国のスポーツ大会」にふさわしい規模とステータスを具備していたようにはどうにもみうけられない。

第3回大会（1938年）について

1934年8月、第2回大会の開催中にロンドンに集まった各参加国の代表が第3回大会の開催地について協議した際、開催候補国としてオーストラリアとカナダがあがった。同会合では開催地を決めず、大会開催に必要な諸条件を整えたうえであらためて翌35年8月までに開催申請するとの手順が確認された。

このことをうけて、オーストラリアでは同年末頃から大会を招致しようとする国内の動きが報じられるようになる。そもそも第1回大会直後の1930年10月、オーストラリア選手団監督を務めたH・R・ウィアは、オリンピックをモデルとしながらもそれとは異なる価値—イギリス流のスポーツマンシップやアマチュアリズム、過度な国家間競争の弊害を免れ、帝国の友好と団結を実現するなど—を有するエンパイア・ゲームを開催する意義を主張し、1938年大会をオーストラリアに招致する運動を起こそうと『レフェリー』紙上で提案していた⁽²⁹⁾。また、1934年大会の南アフリカに代わる開催地をイングランドに譲ったオーストラリアが1938年の大会開催地として立候補するだろうという暗黙の了解があったと考える向きもあった⁽³⁰⁾。1938年のエンパイア・ゲームズはオーストラリアで開催されることになるだろうというスポーツ界関係者の見方が一少なくともオーストラリア国内では一さかんに報じられるようになった。

まず報じられたのはシドニーでの開催の可能性であった。1935年1月にはメルボルンでも立候補しようとする動きがあることが報じられたが、まもなくオーストラリア・アマチュア競技連合 Amateur Athletic Union of Australia 事務長（既述の1930年大会の同国選手団監督）ウィアが「シドニーが第一候補だ」と発言したこともあり、関心はもっぱらシドニーに集まることになった⁽³¹⁾。ただし、オーストラリアでの開催は国内においてでさえ楽観的な展望をもって語られるものではなかった。ロンドンでの第2回大会から帰国したオーストラリア選手団監督H・マクスウェルは、次回大会の招致に関して述べたなかで、シドニーでの開催には政府による1万ポンド規模の財政支援が必要であるとの認識を示した⁽³²⁾。同年11月に豪BEG協会が各競技団体に開催地立候補の是非を検討するよう依頼したときも、1万ポンドの公的な債務保証を求めることが開催の重要な前提であると報じられた⁽³³⁾。

豪BEG協会委員長でもあったシドニー市議 E・S・マークスは、「1万ポンドの債務保証は大会開催のための条件のひとつ」であるものの、入場料収入で相当額をカバーすることがじゅうぶん見込めるので実際には財政負担は生じないと主張した⁽³⁴⁾。

もっと明確に懸念を表明するスポーツ界関係者もいた。1935年初めの『スポーティング・グローブ』（メルボルン）には「ある著名な競技界の権威による分析」という見出しで、（1）競技会運営（2）財政（3）施設（4）参加国という4つの局面からエンパイア・ゲームズのシドニー開催の見通しについて論じる記事を掲載した⁽³⁵⁾。その人物いわく、これまでに国際大会を開催したいずれの国にも劣らぬ能力をオーストラリアの競技界は有している（1）については支障はなさそうだが、（2）から（4）についてはまったく楽観できないという。たとえば、入場料収入などで相殺されるので実質的な財政負担はないはずだとして豪BEG協会が1万ポンドの公的な債務保証を求めようとしているが、第1回大会の際にカナダの当局が公表した大会開催経費が4万ポンドだったことを一自分の記憶に誤りでなければ、との留保をつけて一指摘している。そして、第1回大会がハミルトン市当局や同市民が全面的にバックアップした大会であったことにも言及して、シドニーでそれだけの態勢を整えられるか、と問いかけている。施設についても、シドニーにある陸上競技用トラックがシンダー（黒土）ではなく芝であることなどをはじめ、国際標準に照らして整備が遅れていることを問題視している。さらに彼がもっとも重要視するという参加国の問題について、文化的背景にかかわる次のような興味深い主張もみられる。

・・・大会には本国からの選手団の参加が欠かせないが、平均的なイングランド人 **The average Englishman**（前後の文脈から本国イギリス人全般を指すものと推察される＝訳注）とくにアマチュアはスポーツをさほど真剣に考えていない。スポーツを自分なりの見通しのなかにおさめることを好み、仕事に支障が出るのを好まない・・・国際試合は大陸（ヨーロッパ＝訳注）に週末にでかけるだけなので、（オーストラリアに遠征するために＝訳注）半年間も仕事を休むという考えはイギリス人 **Britisher** には馴染まない・・・だからカナダでさえ、本国に選手団を派遣させるのに途方もない苦勞をしたのだ・・・

大会を成功させるためには参加国を確保しなければならないが、本国及び他のドミニオンから離れたオーストラリアの地理的位置と国際航路の事情から生じる大きな困難があるだけでなく、本国社会にみられるスポーツに対する一般的なスタンスにも考慮すべき困難の一因があると述べている。指摘の当否はともかく、オーストラリアのスポーツ人が本国イギリスに向けたまなざしの先にあるアマチュアリズムのひとつの形を示したものと解釈できる。

エンパイア・ゲームズの開催事業にかかる課題を列挙するこのような「権威」たる人物の見解に対して、豪BEG協会からの返答が2週間後の『スポーティング・グローブ』に掲載された⁽³⁶⁾。その記事のなかで協会事務長 J・S・W・イヴは、過去2大会の開催経費はいずれも1万ポンド以内であったこと、旅費については過去の大会同様「一部補てん」でこと足りること、陸上競技場は前回のロンドン大会もシンダートラックではなかったことを指摘した。そのうえで、もし政府による財政支援がなかった場合は市民が資金調達に動いてくれるだろうとして、シドニーでの開催について楽観的な見方を示した。

オーストラリアの地理的条件や財政問題などいくつかの懸念が取りざたされるなか、豪BEG協会は1935年7月3日に第3回大会招致を正式に決定した⁽³⁷⁾。あわせて、BEG連盟に開催申請を提出する前にニューサウスウェールズ（NSW）州政府に1万ポンドの債務保証を依頼することも決まった。『シドニー・モーニング・ヘラルド』の社説は、ウィンブルドン（イングランド）でのオーストラリア出身テニス選手の活躍から話を起こして、1934年のエンパイア・ゲームズで15名の選手からなるオーストラリアの小選手団がイングランド（選手300名）、カナダ（同120名）に次ぐ数のメダルを獲得して「遠征がすばらしい成功だった」ことに言及しながら、次のように述べている。

・・・次回大会をシドニーで開催するという提案によって、エンパイア・ゲームズが新たな関心の的となりつ

つある．．．．．昨年のロンドン大会では陸上競技，水泳競技，ボクシング，レスリング，ローンボウルズ，自転車競技がおこなわれるいっぽう，女子選手の参加により大会がさらなる発展段階に入ることになった．そのようなエンパイア・ゲームズは，イギリス帝国を構成するメンバー間の同胞意識と協力精神をあとおしする優れたスポーツ大会として今や確立されている．．．．．⁽³⁸⁾

開催の必須要件と目される州政府の債務保証が得られなかった場合の対応について，イヴが「(州政府が支援を拒否するような) 不安はない．万一そのような事態に立ち至れば，大会開催を他州に任せなければならないだろう」と述べ，ウィアも「もしそんなことになったら，ヴィクトリア州に開催検討の機会が与えられるべきだ」と発言したこと，また連邦政府の大臣が入植 150 周年祝賀行事は地方行事ではなく全国行事であり連邦政府も協力すると述べたことが報じられるなど，州政府への働きかけあるいは政治的な足場均しとも受け取れるような記事もみいだせる⁽³⁹⁾．

NSW州政府による1万ポンドの債務保証が7月23日に決定されると，豪BEG協会はすぐさまロンドンのBEG連盟事務局への正式な開催申請をおこなった．8月以降，連盟が開催地を決定するまでの3カ月間，州政府も150周年祝賀行事の一環としてのエンパイア・ゲームズ招致活動を積極的に進めた．州首相B・スティーヴンス名で州内外への働きかけを進めたほか，在ロンドンNSW州代表部や同年11月初めのBEG連盟会議の前にヨーロッパ諸国を歴訪する予定であった州労働大臣J・ダニングムがロンドンでの招致活動を担うことになった⁽⁴⁰⁾．

ニュージーランドや南アフリカの大会関係者からシドニー開催案に対する支持を得られたことなど明るい展望を報じる記事が見られるいっぽう⁽⁴¹⁾，依然としてさまざまな課題があることから開催地の正式決定まで楽観できないことを示唆する記事もあった．10月23日付け『スポーティング・グローブ』(メルボルン)に掲載された記事では，地元では大会開催を期待する声が高いものの，本国からの選手が長い時間と費用をかけてわざわざ来るかどうか，という悲観的な見方も根強い，と直裁に述べられている⁽⁴²⁾．メイン会場となる陸上競技場についても，州政府が3千ポンドの整備費を出すことを表明したものの，シドニー・クリケット・グラウンドにトラックを仮設するか，近接する陸上競技場(シンダーではなく芝)を改修するか，あるいは別の場所に設営するか，と先行きが不透明であることを指摘している．

このようなシドニー開催にまつわる懸念は，オーストラリアの報道機関が独自の問題意識をもって報じていたわけではない．じつのところ，カナダAAUがBEG連盟に提出した文書一ほかならぬ1938年大会の開催申請(正確に言うと，その延期願)一では，オーストラリアの各紙よりもはるかに強い調子で同地でのエンパイア・ゲームズ開催に対する異論がとなえられていた．

．．．．．いうまでもなく，昨夏のロンドンでの会議において全会一致で(次回大会の開催が=訳注)言明されたあとオーストラリアが立候補したことを聞いて我々は失望した．もちろん，かれらにも立候補する権利はあるが，今だ世界的な恐慌の悪影響下に置かれているなかで帝国の辺境で大会を開催するのは間違いだと個人的には感じる．．．．．⁽⁴³⁾

そのようなカナダの異論も最終的には取り下げられた形の結論がまもなく出された．1935年11月4日，BEG連盟の会議がロンドンで開かれ，オーストラリアのシドニーで1938年1月に第3回エンパイア・ゲームズを開催することが全会一致で決まった．『シドニー・モーニング・ヘラルド』は，大会招致のために尽力した人びとを紹介したうえ，マークスとダニングムの「喜びの声」も伝えながら，エンパイア・ゲームズが「帝国の同胞意識と協力精神を称揚する」ものであるという言辞を繰り返した⁽⁴⁴⁾．また，大会がオーストラリア入植150周年祝賀行事のひとつとして開催されることや，陸上競技はじめアマチュアスポーツの振興に資するはずであるとの見方も示された．いっぽう『スポーティング・グローブ』(メルボルン)は，エンパイア・ゲームズのシドニー開催決定に際してBEG連盟事務長E・ハンターが重要な役割を果たしたとの見方を大きくうちだした⁽⁴⁵⁾．それは，1935年1月

にメルボルンで開催された開基 100 周年記念競技会にイングランドチームを率いて参加した際にこの国がエンパイア・ゲームズを開催するに足る施設、人材、技能を有しているかどうかを確かめようとしたというハンター自身の言葉を引用しながら、その際の印象がシドニー開催決定に好意的に働いた、というものであった。

もともと、大会招致を進めた当事者たる競技団体関係者やスポーツ・メディアが示した懸念のいくつかは、その後の開催準備期間に克服すべき現実の課題となった。陸上競技会場は、組織委員会が当初から推し続けたシドニー・クリケット・グラウンドとされた。それは当時でさえ国際大会の標準からは外れた形、すなわち正円に近い形の芝トラックが設営されたうえに、100 ヤード走と 120 ヤードハードル走の直走路はフィールド内—しかもその両端はトラック周回路に重なっていた—に据えられるというものであった⁽⁴⁶⁾。開催期間は当初予定の 1 月から 2 月（5 日から 12 日まで）に変更され、開催経費の収支は最終的に 7500 ポンドの赤字となった⁽⁴⁷⁾。閉幕後には宿舎や食事にかかる選手団からの不平も『シドニー・モーニング・ヘラルド』に現れた⁽⁴⁸⁾。

むすびにかえて

1935 年 9 月、スコットランドの国内協会 SNSF にロンドンの BEG 連盟事務局から書簡が届いた。その内容は、カナダとオーストラリアから第 3 回大会の開催申請が提出されていることをふまえて、「2 つの開催候補地それぞれの場合について、スコットランドからの参加選手数の見込み」を回答することと、同封された両国それぞれの書簡を入念に検討することを求めるものであった。ところが 3 週間後の SNSF 会議の議事録には、「次回大会はオーストラリアで開催されることになった」との報道について事務局長ファーガソンから BEG 連盟に内容の確認を求めたところ、連盟から「そのとおりだ」との返答があった、と記録されている。この SNSF 会議では、この開催地決定—本稿で探ってきたオーストラリアの各新聞では、10 月上旬はまだシドニー開催決定を待ち望んでいる時期である—をめぐってひとしきり議論がおこなわれ、結論として「オーストラリアが次回開催に意欲をみせていることにはじゅうぶん共感できるが、最終決定前にカナダからもっと詳しい提案内容をききたかった」とする書簡を BEG 連盟に送付することになった⁽⁴⁹⁾。

このような SNSF 議事録に記された経緯からうかがえるのは、エンパイア・ゲームズの最初期には、開催地の選定にはいまだ定まった手続きがなく、オリンピック開催時をはじめとする代表者会合と電信や書簡による個別の情報交換によりながら、限られた関係者の間で話が進められていたということである。現在の国際スポーツ界にみられるような激しい「招致合戦」とは無縁であるものの、本国を構成するスコットランドの関係者さえ不満を抱くような「ゆるやかさ」ないし個別の人脈が幅を利かせる余地があった。そこには本国対ドミニオンという単純な二分法では解することができない構造と関係性がみいだせる。

そのいっぽうで、開催候補地となる地元での動きとその一端を伝える言説は、「競技振興」はもとより「帝国の一体性」「経済効果」といった、のちのエンパイア・ゲームズ/コモンウェルス・ゲームズにも通底する動因を反映したものであったこともわかる。どの動因、理念、システムがもっとも強い影響力を有していたかを特定することは容易ではないし、さほど重要でもなからう。注目すべきは、帝国が崩壊しコモンウェルスが急速な変貌を遂げる時期に、さまざまな動因や理念を取り込み、スポーツ界なりに流用することで、より大きな社会的インパクトをもつイベントとして、エンパイア・ゲームズ自体も変容しながら「もうひとつのコモンウェルス」を形成していったということである。

じつのところ、本国とドミニオンが主体となって開催されていたエンパイア・ゲームズが本格的に外見・内実ともに姿を変えていくのは、第 2 次世界大戦のあと、1950 年代以降のことである⁽⁵⁰⁾。大戦による中断はその前後に継続して開催されたスポーツ大会の変貌を考えるうえでしばしば難題をつきつける。されども、政治的・経済的なコモンウェルスが大きく変貌する時期に文化的局面に存在した「もうひとつのコモンウェルス」の実相に迫るためにも、1930 年代の 3 大会、そして大戦後の 50 年代の大会はさらに追究されるべきであろう。

- ① 川本真浩「二〇世紀中葉のコモンウェルス・ゲームズと国際秩序—スポーツ界につくられた「もうひとつのコモンウェルス」—」山本正・細川道久編著『コモンウェルスとは何か』ミネルヴァ書房、2014年、所収。
- ② D. Gorman, 'Amateurism, Imperialism, Internationalism and the First British Empire Games', *The International Journal of the History of Sport*, 27(4) (2010); 川本真浩「エンパイア・ゲームズの「前史」と第一回大会をめぐる」『海南史学』49号、2011年; M.Kawamoto, 'Revisiting the History of the British Empire Games: From the Early Years through to the Inauguration', 『人文科学研究』(高知大学人文学部人間文化学科) 20号、2014年。
- ③ M. Dawson, 'Acting Global, Thinking Local: 'Liquid Imperialism' and the Multiple Meanings of the 1954 British Empire & Commonwealth Games', *The International Journal of the History of Sport*, 23(1) (2006); J. Beck, 'The Forgotten Games: Fifth British Empire and Commonwealth Games, Vancouver, 1954', *Sport History Review*, 35 (2004); J. MacDonald and M.A. Hall, 'Remembering "The Forgotten Games": A Reinterpretation of the 1954 British Empire and Commonwealth Games', *Sport History Review*, 40 (2009).
- ④ G. Ryan, 'The Turning Point: the 1950 British Empire Games as an Imperial Spectacle', *Sport in History*, 34(3) (2014).
- ⑤ 「もうひとつのコモンウェルス」を構成するエンパイア・ゲームズ参加国には、植民地や王室従属領などといった、いわゆる独立国ではない帝国構成単位が含まれているが、用語表記の便宜上、本稿では「参加国」という表現を用いる。
- ⑥ *The Times*, 21 Aug., 1930, p.10.
- ⑦ *Ibid.*, 23 Aug., 1930, p.10.
- ⑧ 英豪の各記事に登場する(英)帝国スポーツ連盟(British) Empire Sports Federationは、実際にはBEG連盟の名称で設立されることになる。
- ⑨ *Sporting Globe*, 22 Aug., 1930, p.6.
- ⑩ *Referee* (Sydney), 10 Sept., 1930, p.15.
- ⑪ *The Times*, 25 Aug., 1930, pp.6, 11.
- ⑫ エンパイア・ゲームズよりむしろ、その直後にシカゴ(USA)で開催されたイギリス帝国とUSAの陸上競技対抗戦のほうが、トロント地元紙のスポーツ面での扱いが大きかったという。Gorman, op.cit., pp.626-627.
- ⑬ B. Kidd, *The Struggle for Canadian Sport*, Toronto, 1996, p.73.
- ⑭ *Scotsman*, 1 Apr., 1932, p.13.
- ⑮ *Referee* (Sydney), 22 Mar., 1933, p.13.
- ⑯ *Sydney Morning Herald*, 16 May, 1932, p.9
- ⑰ *Manchester Guardian*, 16 May, 1932, p.3.
- ⑱ *The Telegraph* (Brisbane), 12 Nov., 1932, p.3.
- ⑲ *Central Queensland Herald*, 11 Aug., 1932, p.21; *The Telegraph* (Brisbane), 10 Aug., 1932, p.1.
- ⑳ *Sydney Morning Herald*, 11 Aug., 1932, p.10; *The Argus* (Melbourne), 11 Aug., 1932, p.8.
- ㉑ *Sporting Globe*, 30 Nov., 1932, p.12.
- ㉒ *Referee* (Sydney), 28 Dec., 1932, p.23.
- ㉓ *The Times*, 10 Mar., 1933, p.6. 記事文中には会議がおこなわれた日付が記されていないが、カナダ・コモンウェルス・ゲームズ協会文書にある1934年大会報告から、この会議が1933年1月30日にロンドンで開催されたことがわかる。Library and Archives Canada, MG30-C164 vol14, file14 "Material compiled for history of 1978 Games – includes reports on 1911 Festival of Empire & 1934 & 1938 games (n.d. 1911, 1934, 1938, 1969-1974)".
- ㉔ "Report of Meeting of British Empire Sports Federation held at Los Angeles, California, U.S.A." in the 4th session held at 2:20pm Dec.9, 1932, *Minutes of the 45th Annual Meeting of Amateur Athletic Union of Canada*, 1932.
- ㉕ このカナダAAU会議では、BEG連盟が各国3名の代表委員によって組織されることからカナダ代表委員として「ロンドン在住のカナダ人3名」を任命することが決められた。翌33年1月のロンドンでの会議において連盟が正式にたちあげられたことの傍証となる記録である。
- ㉖ "Minute of third Meeting of the Scottish National Sports Federation held at No.40 Melville Street, Edinburgh on Monday 24th Oct., 1932.", in *Scottish National Sports Federation Minute Book*, No.1 30 Apr 1931 to 18 May 1950 (stored in Stirling University Archives).
- ㉗ *Telegraph* (Brisbane), 12 May, 1933, p.25.
- ㉘ Library and Archives Canada, MG30-C164 vol14, file14 "Material compiled for history of 1978 Games – includes reports on 1911 Festival of Empire & 1934 & 1938 games (n.d. 1911, 1934, 1938, 1969-1974)".
- ㉙ *Referee* (Sydney), 15 Oct., 1930, p.13.
- ㉚ *Ibid.*, 25 July, 1935, p.3.
- ㉛ *The Argus* (Melbourne), 25 Jan., 1935, p.9; *id.*, 5 Feb., 1935, p.12.
- ㉜ *Sporting Globe*, 26 Sept., 1934, p.6.
- ㉝ *Sydney Morning Herald*, 8 Nov., 1934, p.11.
- ㉞ *Sporting Globe*, 1 Dec., 1934, p.6.
- ㉟ *Ibid.*, 2 Jan., 1935, p.1.
- ㊱ *Ibid.*, 16 Jan., 1935, p.10.
- ㊲ *Sydney Morning Herald*, 4 July, 1935, p.11.
- ㊳ *Ibid.*, 8 July, 1935, p.8.
- ㊴ *Sporting Globe*, 10 July, 1935, p.1.

-
- (40) *Sydney Morning Herald*, 24 July, 1935, p.13; *id.*, 15 Aug., 1935, p.10; *id.*, 16 Aug., 1935, p.12; *id.*, 19 Aug., 1935, p.9.
- (41) *Ibid.*, 16 Aug., 1935, p.12; *id.*, 3 Oct., 1935, p.12.
- (42) *Sporting Globe*, 23 Oct., 1935, p.11.
- (43) Copy of letter from W.A.Fry, President of A.A.U. of C to E.A.Hunter, Honorary Secretary of B.E.G.F, on 23 Aug., 1935 (compiled in Scottish National Sports Federation Minute Book, No.1 30 Apr 1931 to 18 May 1950 (stored in Stirling University Archives)).
- (44) *Sydney Morning Herald*, 6 Nov., 1935, pp.12,13.
- (45) *Sporting Globe*, 6 Nov., 1935, p.9.
- (46) *Sydney Morning Herald*, 5 Feb., 1938, p.15. もっとも、カナダ A A U で作成された大会報告書は、かつてないほど良質の芝トラックであったことが競技記録のレベルの高さからもうかがえる、としている。Library and Archives Canada, MG30-C164 vol14, file14 "Material compiled for history of 1978 Games — includes reports on 1911 Festival of Empire & 1934 & 1938 games (n.d. 1911, 1934, 1938, 1969-1974)".
- (47) 州政府による債務保証 1 万ポンドの枠内には収まったが、本稿でも引用した「最終的には州財政に負担をかける」とはならなかった。
- (48) *Sydney Morning Herald*, 10 May, 1938, p.11. 食事に関する不平は 2014 年にグラスゴーで開催されたコモンウェルス・ゲームズでのジャマイカの短距離走者 U・ボルト U.Bolt による発言をめぐる一連の騒動を想起させるように、この種の大会ではしばしばみられるものである。研究者の立場からすれば、このような取るに足らないクレームさえ、公式報告書には現れない選手宿舎での生活の一端をうかがい知る貴重な情報源となる。
- (49) "Minute of Meeting of the Scottish National Sports Federation held at Edinburgh on Wednesday 9th October, 1935, at 6.30 .p.m.", in Scottish National Sports Federation Minute Book, No.1 30 Apr 1931 to 18 May 1950 (stored in Stirling University Archives).
- (50) 1950 年にオークランドで開催された第 4 回エンパイア・ゲームズは、戦前にもまして「帝国」や「ドミニオン主体」が前面に押し出された大会であった。Ryan, op.cit.

平成27年（2015）10月9日受理

平成27年（2015）12月31日発行